

# 1 「他の九人とはうまくいつているんだろう?」

あるビジネスマンから聞いた話である。

「どうやってもうまくいかない人が彼と同じ課にいて、今日もあの人の顔を見なくてはならないのか」と思っただけで、会社へ行きたくなくなったという。

人間には生理的に合わない人というのがある。他の人は何も感じないような、その人の身のこなしや話し方にも、拒絶反応を示すことがある。そばに来ただけで「ああ、イヤ!」と感してしまふのだ。それはスギの花粉がなんでもないと人と、花粉症になってしまう人とがいるようなものでもある。

彼とその人とはそういう関係だったらしい。

そこで、いろいろ考えた末に上司に相談した。そして、できることなら別の部署に異動させてほしいと話したという。

じつと彼の話聞いていた課長は、

「そうか。話はわかった。君がいやな人間は 君一人なんだな?」

「はい」

「ということば、一〇人いるうちの課の他の九人とはうまくいつているんだろっ？」

「はい」

「だったら何も問題はないじゃないか。君は 君のことばかり気にしているから、そういうことになるんじゃないか。これからは、すべての気持ちをも、うまくいつている他の九人のほうに向けることだ。そうすれば仕事もうまくいく。そして気分がよくなれば、 君のこともいまほど気にならなくなるんじゃないか」

筆者は、この話を聞いて、彼はいい上司に恵まれていてよかったと思うと同時に、明るい気持ちになった。

人はマイナスの方向に顔を向けていると、いつのまにかマイナスの世界の住人になってしまう。そんなとき「目を向けるのはこっちだよ」とか「歩いていくならこの道がいい」というような先達のアドバイスによって、「生きるということ」に開眼していくのだ。

マイナスの方向に顔を向けていると、  
いつのまにかマイナスの世界の住人になってしまう。

## 2

# “絶対的な失敗”を“相対的な失敗”に変える言葉

失敗すると誰もが落ち込む。

それでも、自分一人で「しまった」と思って、その失敗をカバーすることができれば、「ああ、よかった」と胸をなでおろす。心臓の鼓動が少し速くなることはあっても、「大事にならなくてよかった」と、表面的には平静を装って何事もなかったかのように見せることができる。

ところが、第三者にもわかるようなかたちで失敗すると、「失敗した」ということが後々まで尾を引く。「あそこは、こつすべきだったんだ」と反省したり後悔したりしても、失敗したという事実を隠すことはできない。みんなが自分を失敗者と見ているのではないかと気に病んで、なかなか立ち上がれない。

そういうとき、先輩なり上司なりから、「そんなに気にすることはない。以前は、私もそうだった」とか、「私も同じ失敗をしたことがある」というひと言があると、慰められる。「そうか、みんな同じようなことをするんだな」ということがわかると、気持ちのなかで、絶対的な失敗を“相対的な失敗”にすることができる。

「はじめて講演をしたときにはアガってしまって、何を話しているのか自分でもわからなかった」

という評論家の樋口恵子さんの話を、雑誌で読んだか、放送で聞いたかしたことがあるが、そういうことがわかるとホッとする。「ああ、あの人も、はじめはアガったんだ」ということになるからだ。

筆者自身も、はじめて講演をしたときには、話の途中で水を飲もうとしても手が震えてコップをちゃんと持つことができなかった。その話を作家の童門冬二氏にしたところ、「私もそうでしたよ。いまでも講演するたびに緊張します」とのこと。断わりきれないほど講演の依頼がある童門さんにしてからがそうなのだと思うと、自分の失敗など当然のことだと思えてくる。

マイナスと思っていることを「自分だけのこと」と思うと、必要以上に自分を責めたり心配したりする。病気になるっても、同じ病気で元気な人が身近にいと、心配の度合いが低くなる。とにかく、素敵だと思っている人や信頼している人から「私もそうだ」とか「私もそうだった」と言われると、とてもラクになるのだ。

「私も同じ失敗をしたことがある」というひと言があると、慰められる。

# 3

どちらの結論にも、「それがいい、それがいい」

戦国武将である伊達政宗の言葉に「大事の義は、人に談合せず、一心に究めたるがよし」というのがある。

要するに、「自分にとって重要なことほど自分だけで決める」ということだ。それは「自分のことは自分がいちばんよく知っている」ということであり、「自分の責任は自分でとらなければならぬ」ということであり、「頼りになるのは自分だけ」ということでもある。しかし、みずからが決断する過程においては、さまざまな情報を集め、いろいろな人の意見を聞いたり相談することも必要だ。

ところで、人間とは面白いもので、知らず知らず、自分の思いに賛成してくれそうな人を相談相手に選んでいるもの。たとえば、「会社をやめたい」という思いが強いときには、そのことに同意してくれそうな人を選んでいる。おそらく、相談相手から「そうすればいい」などと言われることによって、それまでの悩みや迷いや葛藤などから解放されて、自分の気持ちがラクになることを願っているからなのだろう。

筆者にも、現在の職業につくまでに「このまま勤めようか、やめて独立しようか」と何回も迷

った経験がある。そこで「やめたいと思うのですが……」としかるべき人を訪ねて相談すると、「それがいい、それがいい」と、大いに励まされた。

ところが、「いざ」となると、なかなか決断がつかない。会社をかわるとか職業をかえるという決断は、よほど強い意思やはっきりした目的がないとできないもの。それに、ほどほどの収入が保証されていたりすると、それを捨てて、「不確実な世界」に飛び込むことはなかなかできない。あれやこれや考えた末に、先に相談をもちかけた人の家を訪ねて「いろいろ考えましたが、やはり、もうしばらく勤めます」と話すと、「それがいい、それがいい」と、今度は会社をやめないうことに賛成の意見をあれこれ述べてくれたのだった。

不思議なことに、いずれの場合も「それがいい、それがいい」という言葉に、こちらの気持ち がラクになったのだった。と同時に、「大事の義は、人に談合せず、一心に究めたるがよし」という言葉の理解度も少し増したような気がしている。

賛成してもらえることで、  
迷いや葛藤から解放され、  
自分の気持ち がラクになる。

## 4 「あの人もトイレに行くんだ」

名刺を交換したときに、いちばん先に目がいくところは相手の肩書き。「課長」とあれば係長よりエライのだし、部長ということならもつとエライ人ということになる。

「何をいまさら……」と思われるかもしれないが、自分自身が、日々そういう価値観のもとで生きていることを、改めて考えてみることも無駄ではない。

というのも、部長の前に立つたり、社長室へ行ったりすると、必要以上に緊張して、誰もがいつもの自分ではなくなるからだ。

それはどうしてだろうと考え、その原因を取り除き、もつと自然なかたちで相手と話をしたり仕事をしたりすることができれば、心理的な重苦しさも、もう少し軽くなるのではないかと思えるのだ。

いつも、自分が考えていることより立派なことをエライ人の前で話せたらいいと考えているわけではないのに、つい自分をよく見せようと考えてしまうことが、必要以上に緊張する原因になっている。

本当は、いつも考えていることをいつものように自然に表現したいだけだ。そうすることこそ

が、自分にとつても、相手にとつてもベストな関係なのに、なかなかそのようにいかないのが宮仕えの日々。会社には上下関係というものがあり、上の人はエライという思い込みがあるから。下の人は「上の人はエライ」という思い込みで全身を呪縛されているかのようだ。

社内での関係が下に位置する者ほど、多くの人から呪縛され、その重圧に緊張する。そのたびあたりをうかがい、身体を小さくする。これでは本来備わっている能力を発揮することもできない。ラクにもなれない。

そんなときには「あの人もトイレに行くんだ」とつぶやいてみよう。そうすることで、人間はちよぼちよぼ（大差ない）ということが実感できる。

交渉ごとのようなときにも、このひと言を思い出すことで、相手の肩書きに遠慮したり威圧されたりすることはなくなるだろう。肩書きに恐れ入っているのは自己主張も自己実現もできないではないか。

人間はちよぼちよぼ（大差ない）ということが  
実感できれば、相手の肩書きに  
遠慮したり威圧されたりすることはなくなる。



## 5 上司と親は選べない

男性も女性も、職場でのいちばんの問題は人間関係だという。

仕事における悩み、ストレスの内容を調査した「労働者健康状況調査」でも、そのトップに位置するのは「職場の人間関係」だ。参考のために、それ以外の項目を順に示すと、仕事の質の問題、仕事の量の問題、仕事への適性の問題、昇進・昇給の問題、定年後・老後の問題、雇用の安定性の問題、配置転換の問題……となっている。

とにかく、職場では上司も同僚も部下も選ぶことはできない。また、どのフロアのどのデスクに座るのかも自分が決めるわけではない。要するに、与えられた条件のなかでいかに仕事をするかであり、いかに折り合いをつけていくかなのだ。

社員が人事に関心を持つのも、自分がどんな人のもとで仕事をするのか、誰と隣り合わせになるのが切実な問題だからだ。それぞれの地位や立場によって、「さんが課長になった」とか、「さんが部長になった」ということに対する受け取り方も変わってくる。

「よかった!」「やつぱり……」「ああ、せいせいした」「ちょっと困ったな」「いやだな」「ぞまいみる」などなど、反応や感想は社員の数だけある。

「よかった」という人には、さしあたっての問題はないが、「いやだなー」と感じた人は、その瞬間から気分が重くなる。「いやだなー」の理由は、「すぐ感情的になる人だから」ということもあるだろうし、「なんとなく自分とソリが合わない」とか「お互いに反発する」ということもあるし、「とにかくキライ」ということもあるだろう。

そういうときに、こちらの考え方や性格や気持ちを理解してくれて「次の人事異動までの辛抱だよ」と、慰めたり励ましてくれたりする人がいると、それだけで気持ちがいぶんラクになる救われるのだ。

自分も同じように考えていたとしても、人から同じようなことを言われると、「やっぱりそうだな」と、そのスタンスで毎日の仕事をしていこうという決心も固まる。それに、自分の気持ちをわかってくれる人がいるというのは嬉しいではないか！「わかっている人はわかっている」というだけで勇気が出る。

与えられた条件のなかで、  
いかに仕事をするか、  
いかに折り合いをつけていくか。